

# 父親の子育てネットワーク活動の成立条件と類型化

—家庭教育を支える学習組織としての役割に注目して—

吉岡亜希子

**抄録：**地域のつながりの希薄化を背景とした保護者の孤立が深まっている。共同の営みである子育ての前提が崩れ、家族が閉じた状態におかれているといえる。共働き家庭が増えている現状においては、母親に限らず、父親も親としての役割が高まっている。しかし、父親が親として学ぶ機会は乏しく、家庭での教育は手探りの状態だ。家庭教育支援に関わる対策が講じられているものの、行政の取り組みだけでは十全とは言えず、市民団体と行政との協働の在り方が模索されている。そこで本研究では、「おやじの会」をベースに父親の子育てネットワーク活動を行っている7つの市民団体を家庭教育を支える学習組織と捉え、分析を試みた。成立条件・展開過程、学習内容を整理し、類型化を行うことで市民団体と行政の協働モデルの構築に向けた新たな視点の獲得を目指した。その結果、今回分析を行った7つの実践を「特定の子育て課題の共有・支え合い」、「男女共同参画」、「学校教育支援」、「地域コミュニティ再構築」～以上の4つに類型化することができた。学習内容の志向性に注目した場合、「性別役割分業」と「学校支援・地域づくり」という二つの枠組みが見られた。一方、活動範囲として「地域密着型」と「広域型」に分類することができた。同じ協働といっても学習内容によって、活動範囲を捉えながら実践を展開する視点が必要であることもわかった。

**キーワード：**父親、子育てネットワーク、協働、学習組織、家庭教育支援

## 1. はじめに

本研究は、「おやじの会」等をベースに父親の子育てに関わるネットワーク活動を行っている団体を家庭教育を支える学習組織と捉え、その成立条件・展開過程を整理し、類型化を目指すものである。その際、父親による市民団体と行政の協働のあり方に着目している点が本稿の特色といえる。教育学においては、社会教育研究に位置づくものであり、特に自己教育主体形成論を発展させるものと考えている。

社会教育は、社会教育法において「学校の教育課程として行われている教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動をいう」と定義されている。また、同法においては、家庭教育を含む概念として社会教育が定義されている。さらに国及び地方公共団体の任務として、「家庭教育の向上に資することとなるよう必要な配慮をするとともに、学校、家庭及び地域住民その他の関係者相互間の連携及び協力の促進に資することとなるよう努めるものとする」と規定されている。

社会教育は、子ども、若者、高齢者など学習主体別の研究や子育て協同、地域づくりといった実践そのものを対象とした研究などその対象・領域は多岐にわたる。筆者はこうした社会教育研究において、特に主体形成論から父親の学びにアプローチする研究に取り組んできた。主体形成論は、鈴木敏正によって「教育における主体形成とは『自己教育主体』形成であり、同時に教育実践者となっていく過程にほかならず、それは教育において何のために（教育目的）、何を（教育内容）、どのように（教

育方法)を問い、それらを地域住民(子どもを含む)と教育専門労働者・関連労働者が集团的・組織的・自己規律的に「自己統治」していくこと」と定義され、その到達点が示されている。

筆者はこの理論を援用し、それまで位置付けられてこなかった父親を学習主体として位置づけ、彼らがどのような学習過程を経て、地域の子育て協同実践を担う自己教育主体へと変容していくのかを明らかにしてきた。保育所、幼稚園、小・中学校などで組織されている「おやじの会」の学習過程と意識変容の段階を分析した研究では、学習内容によって「親睦型」と「協同型」があることを明らかにした(吉岡 2006, 2013)。また、学習主体に着目した主体形成論においては、4つの段階を経て父親が社会教育実践の主体となる契機を明らかにしてきた(吉岡 2011)。父親たちが、子育てという営みにおいて、客体ではなく主体として自らと自らの周りの世界を変容させ得る存在であることを示してきたわけだが、学びによって教育の主体となり、実践を展開する力量を形成した父親たちは、2000年代に入り共通した新しい段階へと進展している。それが子育てに関わるネットワークの組織化である。「おやじの会」をはじめとした父親たちの子育てグループがつながりあうネットワークが同時代に全国で生まれ、地域からのボトムアップで組織されているのだ。いずれも学校や行政と連携しながら、父親の子育てを支える新しい学びを創造している。

全国に存在する父親たちの子育てネットワークは、様々な志向性があり、学習内容や方法もそれぞれの問題意識によって工夫がなされている。学習組織としても単独の「おやじの会」だけではなしえない学び合いが豊かに展開していることが分かってきた。彼らのネットワークは、現代社会における深刻な課題となっている家庭教育の困難にアプローチできる住民と行政の協働による親の学び合いづくり、育ち合いづくりにつながる可能性があることも見えてきた。

地域の教育力の低下と家庭教育の困難が指摘されて久しい<sup>1)</sup>。だが、家庭教育を支える仕組みづくりは、いまだ模索段階といえる。2018年11月、文部科学省より、『「家庭教育支援チーム」の手引書』が刊行された。2008年に国の委託事業となって以降、現在まで、保護者が自分らしく家庭教育を行えるよう地域の人材を活用した「家庭教育支援チーム」が組織され支援の充実が目指されている。行政だけではカバーしきれない支援を地域社会全体で支えることが推進されているわけだが、担い手不足や家庭への監視が強化されることへの懸念もあり、全国で721チーム(2017年度)にとどまっている。

住民が行政の下請けになる構造は避けなければならないが地域の中で子育てにかかわる市民活動を組織している団体等と行政との対等な協働関係は現代社会においては不可欠であろう。これまで家庭教育の困難という課題において、父親の位置づけは希薄であったといえる。だが、未曾有の少子化と地域社会の教育力の低下という社会の変容を受け、家庭教育においても父親を含めた地域社会全体で学び合い、支え合う仕組みづくりが求められよう。社会教育研究においても、父親の家庭教育を支え合う仕組みづくりは喫緊の課題といえる(吉岡 2016)。以上から父親たちによる子育てネットワークがどのように成立し、学習組織としてどのような役割を果たしているのか、さらには父親と行政との協働がどのように展開しているのかを整理することは、今日的なテーマといえるだろう。

今回取り上げる7団体は、父親のネットワークとして継続的な学び合いを行いながら市民組織として行政と連携し活動を展開している特徴がある。こうした点は、父親の家庭教育を支えるための市民組織と行政の協働に関わる新たなモデルの構築に向けた視点の獲得にもつながるものと考えられる。

本稿では、「協同」と「協働」という二つの「キョウドウ」を用いている。「協同」については、共

通する目的に向かい意思を持ち事にあたることや組織化する活動とし、「協働」は、協同の概念とほぼ同義ではあるが、行動を共にするいわばチームプレーによって事にあたることとして用いる。

## 2. 調査概要

### 2.1 調査対象

本研究では国内で展開している7つの父親のネットワーク団体を対象とした。対象組織は、国内を代表する父親の子育てネットワーク活動団体である。特に本研究の目的の一つである家庭教育を支える学習組織としての類型化を目指すうえで、先進的かつ目的志向性が際立った団体を抽出した。子育てネットワークには子どもの遊びづくりを主な目的としている団体も多いが、本稿は父親の家庭教育がテーマであるため、親の学びづくりにウェットをおく団体を選んでいる。今回、対象とした7つの団体と所在地・中心的活動エリアは以下のとおりである。

■調査対象団体 1,「父親ネットワーク北海道」(北海道) 2,「北海道特別支援学校おやじネットワーク」(北海道) 3,「お父さんたちのネットワーク」(宮城県) 4,「ファザーリング・ジャパン」(東京都・全国) 5,「京都「おやじの会」連絡会」(京都市) 6,「さぬきおやじ連合」(香川県) 7,「福岡市おやじサミット」(サミット支援組織「ざ・おやじコミュニティ」)(福岡市)

「父親ネットワーク北海道」(以下、「父親ネット」)を除いた6団体は、2000年前後に発足している。そもそも父親の子育てにかかわる活動(主に「おやじの会」)は、その継続性の難しさから長期にわたり活発に活動している団体は限られている。今回対象とした団体は、いわゆる「おやじの会」の継続の難しさという課題にアプローチしつつ、単位PTAにとどまらない父親の学びづくりに挑戦しているあるいはサポートしている点に特徴がある。父親の学びづくりを考える上で、一定程度の継続性があり、その展開過程が分析できる実践を選択した。

### 2.2 調査方法

2017年4月～11月にかけて活動地域を訪問し代表者を中心に父親・関係者に半構造化インタビューを行い、併せて資料収集を行った(筆者は、研究と同時に実践を組織する実践者でもあるため、北海道の2団体については、2017年度以前のものを含んでいる)。インタビュー項目は、①ネットワークの成り立ち、②ネットワークの目的、③担い手、④主な実践内容、⑤行政との連携、以上5点を中心に行った。インタビュー対象者と調査日は表1にまとめた。

表1 インタビュー対象者と調査日

団体名	インタビュー対象者	調査日
父親ネットワーク北海道	会長 副会長	2017.8.26～27、2017.10.28 上記の他、北海道内の実践を通じた調査を含む
北海道特別支援学校 おやじネットワーク	中心メンバーの父親 特別支援学校教員	2012.11.3、2013.9.21 上記の他、北海道内の実践を通じた調査を含む
お父さんたちのネットワーク	世話人 中心メンバーの父親(グループインタビュー)	2017.11.26
ファザーリング・ジャパン	理事	2017.6.4
京都「おやじの会」連絡会	連絡会事務局担当者	2017.8.21
さぬきおやじ連合	代表 中心メンバーの父親・母親(グループインタビュー) 共同実践者である大学教員	2017.8.19～20
福岡市おやじサミット	おやじサミット支援NPO担当者 中心メンバーの父親(グループインタビュー)	2017.9.22～23

## 2.3 分析方法

- ①学習の志向性 本稿は家庭教育を支える学習組織として7つの団体の可能性を探ることを目的としていることから、設立の経緯、目的、実践内容を整理した上で、父親に対する学習内容の志向性を探り分類を行う。
- ②行政との協働 次に市民団体と行政の協働が喫緊の課題であることから、各団体がどのように行政との連携・協働を行いながら父親への学習実践を展開しているのか、その特徴を整理する。
- ③活動範囲 父親の学習を展開する場合、特定の地域を単位として活動を展開しているのか、あるいは学校単位、市町村単位、都道府県単位となっているのか、その活動範囲によって、行政との協働のあり方が規定されるため、学習内容と活動範囲の関連を探る。
- ④上記の学習の志向性、行政との協働の実際、活動範囲の3条件から関連を検討し類型化を行うこととする。

## 3. 結果と考察

### 3.1 父親の子育てネットワーク～7組織の概要

表2に父親の子育てネットワーク実践の概要をまとめた。7つの団体はその成り立ちと目的、担い手、実践内容、行政との協働それぞれ特徴と共に共通項もみられた。本節では、家庭教育を支える学習と協働にかかわる実践の特色を団体ごとに述べていく。

#### 3.2.1 「父親ネットワーク北海道」

北海道内で「おやじの会」の活動や「おやじの会」OB会の活動を行っている父親がつながり、2011年に設立した。「おやじの会」の多くは子どもの卒業と同時に父親も会を卒業することになり、継続性に課題がある。わが子が卒業した後も地域の子どもたちのために力を発揮したいと考えている父親たちの受け皿として生まれたのが「おやじの会」OB会である。「父親ネットワーク北海道」(以下:「父親ネット」)は、こうした思いをもったOB会を中心に組織されている。父親の社会教育研究を行ってきた現事務局長である筆者と「おやじの会」OB会代表者4名を中心に立ち上げた市民組織である。父親同士の仲間づくりと情報交換を目的に交流を深めている。広大な土地の北海道では、移動距離が長く、会員の交流は年に一度の「全体交流会」が中心だ。会員は個人で加入する方式でおよそ40名。「全体交流会」とは別に自らが暮らす地域で父親同士の語り合いを中心とした交流をすすめている。

会員の多くは、園や学校の教員との交流をきっかけに「おやじの会」にかかわり、わが子だけでなく、わが子の周りの子を含めた子育ての環境づくりに取り組んできた父親たちである。「父親ネット」の全体交流会では、子どものいじめや貧困問題、過疎化と学校などをテーマとした学習交流会が行われている。特徴は、社会教育からのアプローチが意識されていることだ。親の学び、つまり親の社会教育実践としての学びづくりが柱となっており、自らが課題を見出し、学習交流会を企画実施する力をつけることが意識されている。

家庭教育にかかわる行政との協働という点では、親の学びの場の講師依頼が多い。この他、2013年には北海道教育委員会の家庭教育にかかわる事業チームメンバーとしてモデル自治体における親の学びの仕組みづくりに関わった。縦割りで進められがちな行政内の親の学びや民間で行われている親の学び合いを横につなぎ、妊娠期から学齢期までの学習機会を一続きのものとしてまとめた報告は市



表2 父親の子育てネットワーク団体の概要

名称	父親ネットワーク北海道 (北海道)	北海道特別支援学校おやじネットワーク (北海道)	お父さんのネットワーク (宮城県)	ファザリングジャパン (東京都・全国)	京都「おやじの会」連絡会 (京都市)	さぬきおやじ連合 (香川県)	福岡市おやじサミット (福岡市)
設立	2011年(平成23)	2003年(平成15)	1998年(平成10)	2006年(平成18)	2003年(平成15)	2002年(平成14)	2000年(平成12)
成り立ち	筆者が父親の社会教育研究として北海道内のおやじの会の調査を行い、その中で「おやじの会」の継続の難しさや学習内容を検討する組織がないという課題を把握。北海道内各地の「おやじの会」有志の父親と「仲間づくり」と「励ましあい」を目的に設立。	札幌市内にある養護学校「おやじの会」が北海道内の特別支援学校54校(2003年当時)に呼び掛けて第1回のおやじサミットを開催。全道から約200人が参加。以後2017年まで続く。呼びかけを行った養護学校の「おやじの会」は校長の働きかけにより2000年に始まる。	仙台市内で「おやじの会」を立ち上げた父親が市内で活動している会との交流を目的に設立。情報交換会を年に1回開催。2003年「遊びのパザール」を開催。2005年から本格的に宮城県内のネットワーク組織をつくる。2006年から東北各県をつなぐネットワークへ。	奈良県で起きた母子3人放火事件がきっかけ。父親が働き過ぎ、子どもとかわれない現状に疑問をもった現在の代表が父親が変われば、家庭や子どもたちも笑顔になるのではないかと考え会を立ち上げることとなった。	2001年頃、市内各地で父親を中心としたサークル活動が拡大。全市的なネットワークの構築に向けて、互いの連携も始まり、2003年、京都「おやじの会」連絡会が発足した。	2002年に県内の「おやじの会」4団体がつながり合い設立。2003年に他県の取り組みを知りために全国で初めての「全国おやじサミット」を香川で開催。「さぬきおやじ連合」は、毎年「おやじサミットinかがわ」を企画、開催している。	市内各区に「おやじの会」はあったものの一堂に会する機会がなく、情報交換の場が欲しいとの声を受け、有志によりサミットを開催。会場担当の負担軽減のために2003年『さ・おやじコミュニティ』発足。開催ノウハウを伝えながら協力する組織。「NPO法人男女・子育て環境改善研究所」が事務局を担っている。
目的	子育てに関わるグループ活動を行っている父親の仲間づくりと励まし合い。父親に限定せず、母親や子育て支援関係者、地域住民、大学生等も会員となっており、子育て課題や世代間交流を意識した学習交流会を企画、親の社会教育が中心な目的とされている。	「全道の(盲・聾・養護・支援学校など)おやじたちが集い、子どもとの余暇活動や育て方、おやじや母の活動について交流し、親交を深める」ことがサミットの目的とされている。	「父親不在の子育てを乗り越える。父親が家庭に帰り、子どもとともに楽しみながら地域活動にでかけろ。身のまわりのひとりひとりの尊厳のためにゆるやかに肩を組んでいく」(「みちのおやじ宣言」より一部抜粋)ことが目指されている。	コンセプトは「父親を楽しむ」。  父親支援事業を通した「男性のライフスタイル革命」が目指されている。  乳幼児期の子育てをしている父親を主なターゲットと位置づけている点特徴。	「全市のおやじの会の連携促進や情報共有、それらを通じた、家庭における父親としての子育て参加から、地域のおやじとして、地域の子どもは地域で育てる」という本市の理念の実現を主な目的としている(京都市教育委員会生涯学習部学校地域共同推進担当)	【父親が子育てや学校、地域活動に関わり、子どもたちとの様々な体験活動を通して学校や地域・親と子のつながりを深め、子どもたちの健全な成長のために活動している団体】 (「地域でいきいき子育て」ハンドブックより)。父親が活動できる場の創出により、現役だけでなくOB、地域住民の参加を促す。「おやじの会」の設立やネットワーク支援にも取り組む。	サミットは、情報交換のための分科会開催と父親同士の間親会を主な目的として開催。サミットをサポートする『さ・おやじコミュニティ』は、月に一度の定例会を開催。この中で開催に向けた顔合わせ、当日の運営助言を行っている。サミット関連以外にも校内キャンプのノウハウなどテーマを決め継続的な交流をしている。
担い手	「おやじの会」OB会組織者、「おやじの会」メンバー、子育て支援に関わる実践者。父親だけでなく母親、子育て支援者、社会教育を専門とする大学教員なども中心の担い手となっている。	各校「おやじの会」のメンバーが、持ち回りでサミットを開催。父親と教員の協働で行われてきた。担い手として関わる父親の減少傾向が続き、教員の負担が増加。こうした変化がサミット終了につながった。	「おやじの会」メンバー、「おやじの会」OB、お父さんのグループ活動に参加している人、地域活動をしている人、男性だけでなく女性も参加している。拘束のない、この指とまれ方式で運営。芸術・文化活動を通して地域活動を行っている大学教員の父親が中心の担い手となっている。	子育て中の父親を中心に女性のメンバーもいる。 全国各地に支部があり、支部メンバーである父親への講師依頼も多い。	各校のおやじの会で活動するメンバーやOBなどの有志が集まって構成している。事務局を担当する京都市教育委員会と連携し、全市のおやじの会に関わるイベント等を開催している。	2001年ごろ「おやじの会」が立ち上がり、2015年には県内で約60の「おやじの会」が活動するに至る。現役の保護者だけでなく、OB、地域住民なども担い手となっており、「さぬきおやじ連合」もOBが活躍。また、生涯学習を専門とする地域の大学教員や県の生涯学習担当者とも強い連携がみられる。	「おやじの会」のメンバー有志を中心にNPO法人運営者が、サミット開催等のノウハウを伝授するコーディネーターの役割を担う。この独自の組織づくり、体制により安定的な継続と自主性が維持されている。『さ・おやじコミュニティ』を拠点に担い手の父親たちは通年で交流している。
主な実践内容	年に1回、全体交流会を開催。北海道各地で行う会員の「父親学習会」の応援、他団体との協力でよる親の学びの場の創出。子育て、教育に関わる市民講演会、学習会の企画、市民による「さっぽろ子ども・若者白書」制作等にも関わる。  2017年から父子家庭当事者交流や「ハンドブック」作り、情報発信等も行う。	サミットでは、子どもたちのステージ、教育講演会、シンポジウム、懇親会を行い、全道の父親交流を進めてきた。  2017年、最後のサミット開催。サミットとしての活動は終了。	仙台市内のネットワーク活動「遊びのパザール」など宮城県内のネットワーク活動 東北各県をつなぐネットワーク活動  仙台市内、宮城県内、東北各県と段階的にネットワークを広げている。お父さんの活動をつなぐサミットやフォーラムは、自主的に展開。 ※震災の経験も他の地域に向け発信	乳幼児期の子育てや男女共同参画社会に関わる講演を行う講師としての事業が多い。「絵本ライブ」の実施依頼も多い。 「イクボス」「イクジイ」などの言葉を世に送り出す。「ババ力検定」も注目された。NPO法人として安定的に運営するための多角的な事業展開が行われており、父親の教育支援にかかわる新しい事業体という側面も。	総会・情報交換会の開催、薬物乱用や防災に関する啓発活動の実施、勉強会の開催、人権啓発活動への参加、PTAフェスティバルにおける「O-1(オーワン) グルメグランプリ」の開催など。	各校、各地区の「おやじの会」では、独自の取り組みを展開。漁業が盛んな地域では父親たちが釣ってきた魚を紹介するイベントを開いたり、都心部ではブレイパークを開催し自然体験の場づくりに取り組んでいる。「さぬきおやじ連合」では、こうした各地区の取り組みを交流する機会をつくっている。また、県内全域の親子に呼び掛け、合同キャンプを実施、地区を越えた交流を深めている。	福岡市内7区で順番にサミットを開催。サミット開催時に2年先の開催地候補を募っている。プレゼンテーション合戦で開催地が決定する。サミットはおやじの会の運営や子育ての課題をテーマにした分科会に加え出来立ての料理を振る舞い合う懇親会の二本立てとなっている。教師や公民館館長、母親らも参加。サミットが保育所から大学までをつなぐ役割を果たしている。
行政との連携	北海道による家庭教育事業への協力、札幌市の子育て支援、親学習への協力など。単発で講師等を依頼されるほか、家庭教育事業を検討するワーキンググループメンバーとしての依頼もある。中心的に活動するメンバーは、北海道の社会教育委員を委嘱されているほか、在住しているまちの社会教育委員や町内会役員、保護司などを担い、行政とも連携しながら活動している。	おやじサミットの取り組みにより、特別支援学校の教職員と父親の力強い連携が生まれた。現在も各校の教職員と父親の連携は継続されている。教育委員会との連携はあるものの、おやじサミットは、学校と父親たちとの協働が中心であったといえる。	2004年度、家庭教育支援推進事業を県から委託され「おやじの会」の掘り起こしとネットワーク化に取り組む。その他にも県の委託事業としておやじソフトボール選手権や「みちのくおやじフォーラム」、「日韓おやじフォーラム」、父親の家庭教育参画支援事業として「遊びの案察」等を企画実施。メンバーは、県の社会教育委員等も継続して長く担っている。	全国各地の自治体主催の子育て講演会や男女共同参画研修、セミナー等の依頼多数。乳幼児を育てている父親だけでなく、おじいちゃん世代の孫育てや企業の管理職を対象とした意識啓発などもプロジェクトとして取り組んでおり、行政にとっては連携が取りやすい団体といえる。	特徴は行政が事務局を担っている点。各校「おやじの会」に対する事業経費の支援や行事のための締めあい機などを貸し出す「おまっしやるか・かしまっせ制度」を整え好評を博している。また、複数の「おやじの会」の連携・合同事業にも経費の支援が行われ、講演会や親子スポーツ交流等に利用されている。事務局の京都市教育委員会との連携により各事業の活性化が図られている。	2010年、県教委の家庭教育の向上に関わる事業を委託され、フォーラム等を開催。以降、県教委と連携しながらおやじの会の交流事業や子ども体験活動を企画実施。子ども体験活動が乏しいという現代社会の課題とおやじ連合の子どもに体験活動を提供したいという思いが一致した連携となっている。この他、県が行っている育児フェスティバルには、食べ物を提供する店を出店し協力している。	サミットの後援には福岡市教育委員会等が名を連ねるものの、自主独立で運営されている。20年近く毎年活発に交流が続いている秘訣は、開催を担う「おやじの会」のリーダーや支援組織が交流を重ね丁寧なノウハウの伝授が行われていることと前例主義でなく、主体的な創意工夫が担保されている点にある。父親たちの独自のパワーで交流を続けていく方向が特徴。

民目線の取り組みとして評価されている。また、設立後7年を経過した現在、「父親ネット」役員は北海道や市町村の社会教育委員、町内会役員、保護司など、地域の子どもを支える活動へと広がりを見せている。2018年には公的福祉団体の助成を受け、父子家庭当事者と共に特有の課題や具体的な支援内容・方法をまとめたハンドブックを作成するなど、新たな領域への取り組みも始まっている。

### 3.2.2 「北海道特別支援学校おやじネットワーク」

札幌市内にある養護学校校長の呼びかけで校内「おやじの会」がはじまったのは2000年のことである。「都合のいいときに、やりたいことを」というポリシーで、看板作り、そば打ち、懇親会などを重ね、2002年には『おやじの会夏祭り』を開催。現在は地域住民も含め300人以上が集まる「地域のお祭り」として位置づいている。また外遊びをする機会が少ない子どもたちに「風を感じさせたい!」という思いから『おやじと遊ぼう』という企画をはじめ、「チャリタク」「車いすダンス」「車いすサッカー」「雪と遊ぼう」などの遊びを通して子どもたちを支える人の輪が広がった。自由な参加スタイルと大胆な発想、実行力が持ち味だが、父親の思いを語る場づくりも大切にしているという。

2000年以前に別の特別支援学校で「おやじの会」が立ち上がっていたこともあり、2003年2月、居酒屋で盛り上がった父親と校長らが呼びかけ人となり「全道サミット」が開催されることとなる。北海道内にある特別支援学校54校（当時）に呼び掛け、「サミット」が開催されたのは同年の11月のことだった。北海道内各地から約200人が集まり、講演、シンポジウム、懇親会が行われ、意気投合した父親たちは、以後、全道各地を周り開催することとなる。各校の校長によるネットワークが父親たちの活動をバックアップする事務局機能を果たした。2012年には全国の「おやじの会」が交流するサミットを「札幌おやじネットワーク」と共に開催した。小・中学校と特別支援学校の「おやじの会」が混ざり合い企画を練り上げ成功を収めた札幌サミットは、画期的な取り組みだった。

特別支援学校に通う子どものケアは様々だが、例えば肢体不自由の場合、お風呂の入れ方など力のある父親ならではの役割もあるという。こうしたことの情報交換ができるのもサミットの持ち味だ。特別支援学校の親同士を結び、閉じがちであった学校を地域へ開いていく方向が目指されてきた。だが、2017年のサミットを最後に全道の交流は休止となった。キーマンとなっていた校長の退職や厳しさが増している保護者や教員の労働環境の変化、サミットの事務局を主体的に担う父親の育成が必ずしも十分に展開できなかったことがその理由といえる。サミットの情報交流では、介護を含めた行政支援における地域格差が報告されるなど学校単位の「おやじの会」では見えにくい課題が共有されてきたという。ネットワーク活動により、父親と学校教職員との協働は大きく進展したものの、親の学習実践として、行政と協働する展開にはならなかったといえる。全道のサミットは、休止となったものの各校の「おやじの会」は豊かに継続している。

### 3.2.3 「お父さんたちのネットワーク」

1990年代後半、小学校のPTA副会長だった父親が「自分と同じ父親がPTAにいないのはなぜか。仲間が欲しいなあ」と思っていたことから「おやじの会」設立となった。当時、仙台市内に「おやじの会」が4団体あったものの直接的な交流はなく、「おやじの会」という名称も活動も一般には知られていなかった。会の意義を広く知ってもらうため、当時流行していた「ミニ4駆」の大会を学校の体育館で開催。子どもからは大好評となり、テレビでも取り上げられた。その後も親子で参加する「ミ

ステリートレイン」等の事業を企画。子どもや親から喜ばれ、気をよくした世話人たちは1998年に仙台市内で活動している父親たちのグループ11団体に声をかけ、情報交換を目的としたネットワークを立ち上げる。その後、仙台市内以外の宮城県内で「おやじの会」が立ち上がっていることがわかり、彼らともつながって2005年に「遊びのバザール 05 in 鹿島台町」が開かれる。こうして仙台市内のネットワークが宮城県内のネットワークへと発展していった。2006年には東北各県をつなぐ「みちのくおやじフォーラム」へと発展していくこととなる。

家庭教育にかかわる行政との協働は積極的に取り組まれており、県との信頼関係も厚い。例えば、2014年の県生涯学習課の施策として、「2、家庭教育支援の充実」が挙げられているが、その内の「1、協働教育基盤形成事業」に次の3つの事業が位置づけられている。(1) 家庭教育支援者の養成、(2) 子育てサポーターリーダーネットワーク研修、(3) お父さんたちのネットワーク会議。つまり(3)の事業として、市民組織である「お父さんたちのネットワーク」が県の家庭教育にかかわる協働事業として明確に位置づいているのだ。

現在、県教委・家庭教育支援として全県で進められている「親の学びのプログラム」では、「お父さんたちのネットワーク」が父親版プログラムの作成・普及を担っている。このプログラムは、子どもの発達や子育ての課題に沿った内容を細分化してプログラムをつくり、その冊子を手掛かりに親の学び合いの場をつくる事業となっている。県内でこのプログラムが実施される場合、「お父さんたちのネットワーク」が人を派遣し、コーディネート役を務めている。こうすることで県内各地に父親たちの仲間づくりの“火をつける”ことになっているという。

県職員とのつながりは2005年の宮城県内のネットワークづくりに取り組んだ時期からはじまったという。10年以上にわたり切れ目なく県の家庭教育にかかわる事業を協働で取り組み、継続している。父親と行政職員を近づけた取り組みは、2006年の全国のおやじの会のアンケート調査であったという。調査の時間がいわゆる双方にとって学習の時間となり、共通理解の契機ともなった。その後、東北6県のネットワークづくりを目指したフォーラムにおいても多くの準備時間を共有することで相互理解が進んでいったという。こうしたつながりの深まりにより、県の社会教育委員をはじめとした委員の依頼も増えていった。また、行政の仕事の下請けにはならないことを当初から意識しており、対等な協働関係を理解してもらう努力も重ねてきたという。2016年には、「お父さんたちのネットワーク」のメンバーが県内の教育関係者、PTA、企業人らと共に「教育の未来を支えるネットワーク」の立ち上げに参加し、教育の未来を考えるための学び合いの場へも活動を広げている。

#### 3.2.4 「ファザーリング・ジャパン」

2006年に設立した「ファザーリング・ジャパン」(以下、FJ)は、2018年12月現在で343人の会員数となっている。SNSでの情報交換やつながりが主となっている。新しい形態の父親支援団体だ。特徴はプロジェクトごとに会員が動いていることだろう。2008年の「パパ力検定」や2009年の「ファザーリング スクール」、「イクボス」など時代の先端を走る提案や学びの場を次々と打ち出している。父親の育児について語れる人材が少ないため、行政からの講師依頼が多いという。FJの中心的な事業は、セミナー等の講師だ。全国各地の会員は、地域の子育て支援や家庭教育にかかわるセミナーの講師として活躍している。2014年にはこうした活動にかかわる会員向けに「ファザーリング アカデミー」を開催している。これから講師を目指す人のための講座で、4回連続の講座を大阪、青森、



福岡などで開いている。

全国の「おやじの会」は幅広い子どもの年齢層で展開しているが、FJのターゲットは地域に子育て仲間も居場所も少ない0～2歳の子どもの父親である。FJの「パパスクール」では、こうした層へ“パパサークル”の立ち上げを働きかけている。FJのもうひとつの特徴は、「笑っている父親になろう」というメッセージに込められている。さまざまな父親支援活動が実は母親を笑顔にすることという目的も根底にあるのだという。また、「行政にとっても使い勝手がいいのでは」と理事であるメンバーが分析する通り、行政との協働を積極的に進めている。一方、課題も意識されている。そもそも自治体の父親支援は活発とはいえず、FJメンバーでもある研究者の調査によれば、父親の育児支援に積極的な自治体は、16.9%に過ぎない（小崎 2017）。さらに行政の場合、単年度での事業が多く、仕組みをつくった後は、地域に任されるケースが多く、継続が難しいという。父親を対象とした支援の充実と共に継続性のある市民協働や住民自治にどのようにアプローチできるかがこれからのテーマと考えられている。以上のようにFJは、新しい仕事興し、新業種の誕生ともいえるだろう。行政とタッグを組んで、父親の家庭教育を支援する仕事を興していく・・・、新時代の父親教育支援団体ともいえるだろう。その意味では、今回取り上げる他の団体とは一線を画すものであろう。

### 3.2.5 「京都「おやじの会」連絡会」

2001年頃から市内各地で父親を中心としたサークル活動として広がり、わずか2年後の2003年には86の小学校に「おやじの会」が誕生した。最盛期は178校（2008年）にも及んだ。2017年現在、市内の園、小中、総合支援学校の内、150校で「おやじの会」が活動している。「京都市「おやじの会」連絡会」（以後：「連絡会」）は、学校単位の「おやじの会」のサポートとそれらを横につなぐこと、父親たちの研修などが目的となっている。特徴は、市の教育委員会生涯学習部が「連絡会」事務局を担っている点であろう。2003年に「おやじの会」関係者と教育委員会が連携して設立した経緯もあり、当初から学校・行政と「おやじの会」が密接につながりながら展開してきたといえる。連絡会の事務局を生涯学習部が担うメリットは、連絡手段が確立していることがまずあげられるだろう。定期発行している情報誌「おやじのちから」の配布など情報提供もスムーズだ。「連絡会」が運営している「O-1（オーワン）グルメグランプリ」は2017年で5回目となる名物行事に成長している。市内のPTAフェスティバルの一環として行われているもので、父親たちの模擬店で提供する料理のおいしさやアイデアを競うものとなっている。この他、「連絡会」では父親と行政の職員が協働し、父親の学びの場となる研修会を開催することも重要な事業となっている。

また、学校ごとの単位おやじの会への経費補助を行うほか、複数の「おやじの会」が集まり、交流を目的としたスポーツ大会や講演会、ワークショップなどの合同事業にも別途経費補助の制度を設けている。合同ソフトボール大会や子どもとおやじのドッジボール大会、地域の複数の小中学校合同のフェスタ等が開催されている。行事開催の際に必要なわたあめ製造機やフライドポテトのフライヤー、大鍋などの貸し出しを行う「おまっしょろか？かしませ！」制度を整え、活動の活性化に力を注いでいる。だが、連絡会を行政で担うことにはともすれば企画は父親たちが内容を検討するものの、準備作業は行政の担当者が行うことが多くなりがちな面もあるため、主体的な活動づくり、つながりづくりという面では、配慮が必要となる。とはいえ、継続的に150ものおやじの会が運営されている点は、「連絡会」のサポートによるところが大きいだろう。「連絡会」という仕組みづくりは、



継続性という課題を抱える全国の「おやじの会」にとって、ヒントとなる取り組みといえるだろう。

### 3.2.6 「さぬきおやじ連合」

2002年に県の教育委員会の呼びかけで県内の「おやじの会」4団体が集まり交流をおこなったことが「さぬきおやじ連合」のはじまりだった。集まったメンバーが「他の県のおやじたちが何をやっているのか知りたくて」2003年に「全国おやじサミット in 香川」を行政と協働で開催。県教委とはこの頃から二人三脚で事業を行い、香川ではじまったこのサミットは全国各地で開催される父親たちの学びの場となっている。現地実行委員会形式で、すでに15回を迎える名物行事に発展している。

「さぬきおやじ連合」の中心的な担い手である父親は、もともと小学校のPTA会長だった。PTA活動に父親が少ないことに問題意識をもっており、父親が参加しやすい組織として全国で発足しはじめていたおやじの会同様の「栗林おやじ塾」を発足。栗林地区は高松市内の中心部に近く、高層マンションなどが並んでいる。そのため、子どもが日常生活の中で自然に触れる機会が少なく、地域の課題として意識されていた。こうした地域課題へのアプローチとして、「栗林おやじ塾」では、月に一度地域のコミュニティーセンターの庭で「栗林プレーパーク」という子どもが自由に遊べる場を開設している。決して広くはないスペースだが、毎回50人程度の子どもが集まり、賑わっている。このほか、野外キャンプなど屋外活動を不定期に開催している。

「さぬきおやじ連合」は、スタートが県教委の呼びかけだったこともあり、県の生涯学習担当者との協働が進んでいる。例えば、県の家庭教育の向上にかかわる事業として「父親の家庭教育参加支援事業（2011）」や「おやじ力向上事業（2016）」などの委託を受けている。こうした連携により、県内の「おやじフェスティバル」や「おやじフォーラム」が開催され、父親の学び合いの場が創出されている。さらに地域の父親と地域の子どもが遊び・出会う場として、県内の親子に呼び掛けて行われる「合同キャンプ」が実施されている。これらの事業委託予算は、年度によって異なるが、100万円～200万円に及び、県の家庭教育にかかわる事業パートナーとして明確に位置づいている。

こうした県教委と市民組織である「さぬきおやじ連合」の関係性は、県教委が発行する親育ちのための「ハンドブック」にも表れている。県内の家庭教育支援にかかわる団体紹介のページに、香川県子ども会育成連絡協議会やPTA連絡協議会とまったく同等に「さぬきおやじ連合」が掲載されているのだ。また、「さぬきおやじ連合」は、父親と行政職員のみならず、地元大学の生涯学習教育研究センター教員とも協働関係が築かれており、3者の連携が活動の大きな原動力となっている。

### 3.2.7 「福岡市おやじサミット」～事務局機能『ざ・おやじコミュニティ』

2000年に小中学校で活動していた「おやじの会」が一同に集まり語ろう！と、第一回サミットが開催されている。当時は中学校で荒れがみられ、校長らの呼びかけもありサミットが開かれた。好評を博したため翌年も開催となり、以来19回を数える。福岡市の行政区である7つの区を順番に回りながら開催する方式をとっている。サミット開催時に2年先の開催希望者を募る。手を挙げた「おやじの会」の代表は、サミット参加者全員の前で思いを語る。より思いの強い「おやじの会」が開催校として指名されていく方式だ。開催区の小中学校おやじの会が連携して実行委員会を組織することもある。主に小・中学校で開催しているため校長や教頭、教師・PTA・地域団体との協力は欠かせない。内容に関する唯一の約束事は、父親たちが話す時間を十分にとることだという。来た人がみな主役と

いうことが共通認識となっている。

分科会後に恒例となっている大交流会は、「おやじの会」有志による出店だ。調査で訪問した2017年のサミットでは、海産物を焼くブースあり、パスタを茹で上げるブース、地酒のコーナーも設けられていた。運営のコツや地域連携の面白さなど分科会でたっぷり話し合いをした参加者が学校のグラウンドに集合し、父親だけでなく、母親、教師、地域住民と飲食を伴う交流で更に親睦を深めていた。

福岡市は小学校区ごとに公民館が設置されている。おやじの会の打ち合わせなどは公民館を利用することが多い。そのため、サミットを開催する学校に近接する公民館館長による応援体制が整っている点も特徴だろう。小中学校の教師や公民館館長との強固な連携がみられるものの、サミット開催に関しては社会教育・家庭教育にかかわる行政との財政面での連携はあえて行っていないという。

「福岡市おやじサミット」が18年間活発に事業を継続できた秘密は、父親たちをサポートする事務局体制にある。もともとのおやじの会の活動を行っていた父親Hさんが2回目のサミットに参加した際、教師への負担が大きいことや毎年持ち回りという方式は、一からの準備となり父親たちの負担が少なくなかったという。そこでサミット支援組織として『ざ・おやじコミュニティ』を立ち上げ、恒常的なサポートを担うこととなった。毎月第3月曜の夜に「三月海」という会合をHさんの職場であり『ざ・おやじコミュニティ』の事務局を兼ねているビルの一室で開催しており、2018年現在、200回を超えている。こうすることで、ノウハウの伝授がスムーズとなり、開催負担が大幅に減少する結果となっている。福岡の場合、おやじの会の自主性の保障と事務局体制の整備が継続のカギとなっていた。父親たちは、開催地域ならではの分科会や懇親会づくりを企画段階から主体的に取り組み、創りあげる作業を丁寧に行っていた。この積み重ねが活気を保つ秘訣であった。

以上、7団体の実践の特徴をみてきた。次章では、実践における学習内容と活動範囲に着目して類型化を行っていくこととする。

## 4. 類型化

父親による7つの子育てネットワーク実践をみてきた。家庭教育を支える学習組織として捉えた場合、現段階ではその特徴からa.b.c.dの4つに分類することができた(図1)。類型化の構成要素を図式化すると、横軸は「学習内容の志向性」という視点から①学校教育そのものを支えることや子育て・教育からの地域コミュニティ再構築を志向する“学校支援・地域づくり”という方向性と②性別役割分業を乗り越える社会の構築を志向する方向性がみとれた。一方の縦軸は「活動範囲」に注目した。①学校単位や校区、市町村といった地域ごとの特性、個別の子育て課題に対応した組織づくりを行っているネットワークを“地域密着型”と捉え、②特定の学校や特定の地域に限定しない父親全般を対象とした働きかけを想定しながら都道府県や全国を単位とした広域の組織づくりを展開しているネットワークを“広域型”とした。活動範囲に注目して分類した場合、学校単位、市町村単位、都道府県単位での協働による学びづくりの連携のあり方が見えてくるだろう。

以上の横軸と縦軸をそれぞれ位置付けた場合、次の4分類となる。7つの団体は4つの分類の内ひとつにあてはまるものもあれば、複数にまたがるものもあった。

一つ目のa.は、「特定の子育て課題の共有・支え合い型」である。これは、例えば「北海道特別支援おやじネットワーク」に関わる父親たちによって語られていた障がいのある子どものケアと父親の役割や「父親ネット」シングルファザーハンドブック作成時にみられた父子家庭当事者特有の課題の

共有が該当する。どちらも当事者による少人数での経験交流を丁寧に積み重ねることが父親の力量形成につながっていた。ネットワーク活動と行政の協働という点では、学校を交流の場として開放することや地域の会館などを費用の負担なく利用できる支援、当事者自身による学習内容の設定が効果的であった。また父子家庭の父親に対しては、当事者の声をまとめるための財政的支援が「ハンドブック」という成果物作成を促すことになっていた。

二つ目の b. は、性別役割分業の克服を志向しかつ広域の活動を志向する「男女共同参画型」である。これは、「FJ」が該当するだろう。「FJ」の場合は、乳幼児期の子育てをしている父親を対象とした仕事や家庭への向き合い方、生き方そのものの問い直しが学習の中心といえるだろう。講演会・講座の講師派遣という形での行政との協働が多くみられる。根底には、母親支援があり、男女共同参画社会の実現に距離がある日本社会全体への問題提起を含んでいるといえるだろう。現状では、行政との協働の多くが単年度予算であるため、行政による父親への家庭教育支援の継続性、父親の主体的な学びづくりという面では課題が少なくない。行政が企画して「FJ」から講師派遣だけを依頼する形の学びでは、父親が親として育ち合う継続的な実践には展開しにくい。とはいえ、活動を通して考え方に共感した全国の父親たちが、自らが暮らす地域に支部を立ち上げ、仲間を増やしており、新しい時代に向けたこれまでにない父親への教育支援団体として広がる可能性があるだろう。

三つ目の c. は、学校支援を志向し、かつ地域密着型の「学校教育支援型」である。子どもと父親や父親同士が学校を基礎単位としながら、遊びやスポーツを媒介に相互理解を深めている京都の「連絡会」が該当するだろう。子育てに関わるきっかけが少ない父親にとって、学校教育の中に位置づいている父親たちの活動に加わるルートは、ハードルが低い。だが、子どもの卒業と共に熱心な父親が「おやじの会」を卒業すると活動が停滞してしまうケースが多い。「連絡会」という組織をつくり、行政が下支えをすることで、長期にわたり安定的に市内小・中学校を中心に「おやじの会」が継続して

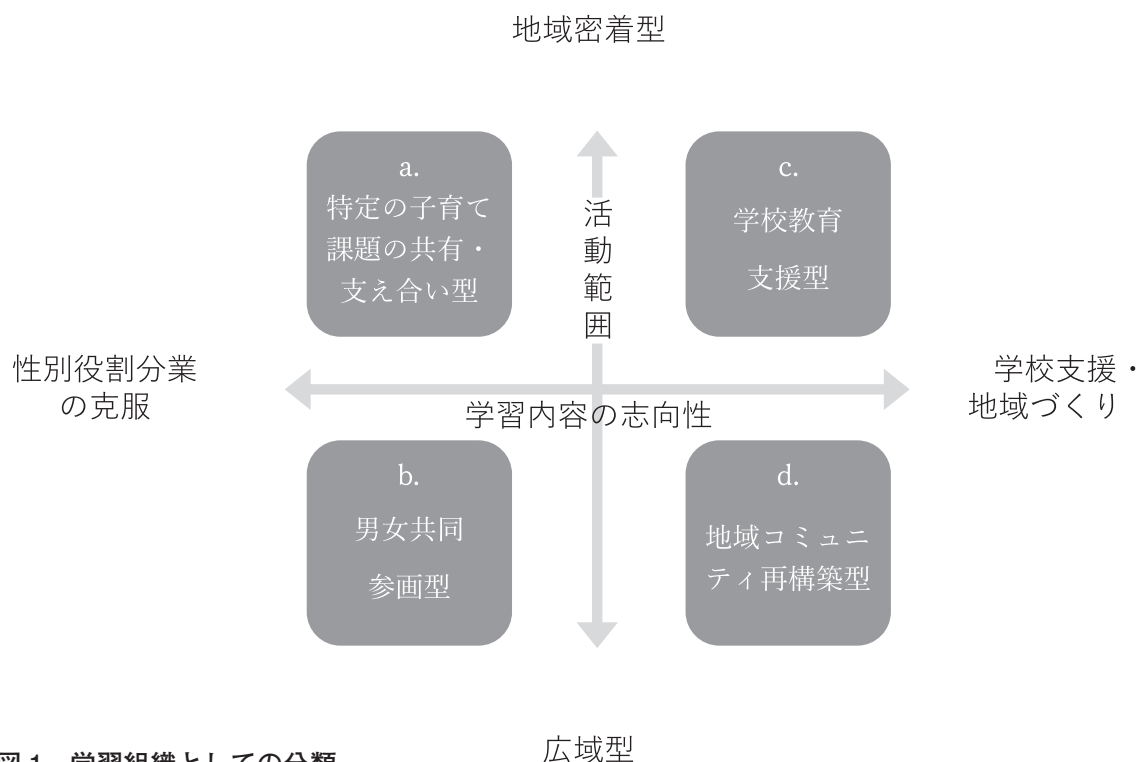


図1 学習組織としての分類



いる点は注目すべきだろう。一方、福岡の「おやじサミット」も学校を基礎単位としながら父親同士が活発につながり合っている。学校からはじまったつながりが地域の子どもたち全体への活動へと広がり、現在はサミットを開催することによって各地区の保育所・幼稚園、小・中学校、高校、大学までをつないでいる。その点では、福岡は、次の「地域コミュニティ再構築型」にも位置づくだろう。福岡は、あえて行政からの財政支援は受けず、独自の事務局体制を構築していた。父親から父親へ様々なノウハウを伝えていく努力があった。主体的な取り組みを堅持することで、20年近くにわたり活気が衰えていない実践は、協働の在り方に一石を投じるものといえる。

四つ目のd.は、地域づくりを志向し広域型の「地域コミュニティ再構築型」である。ここには宮城の「お父さんたちのネットワーク」、香川の「さぬきおやじ連合」、福岡の「福岡市おやじサミット」の実践が位置づくだろう。「父親ネット」の一部も該当するが、宮城、香川に比べ、協働という面では更なる工夫の余地があるだろう。いずれの団体も中心となっている父親は、いわゆる「おやじの会」のOBたちである。わが子だけの父親から地域の子どもの課題や地域コミュニティそのものの未来を考え、それらをどう乗り越えていくかが中心的な学習課題となっていた。

行政と父親たちとの協働という点においては、宮城も香川も県内全域をエリアとして広域で父親の家庭教育支援の仕組みを考え、仕掛けていくキーマンがネットワークのメンバーであった。どちらも基礎自治体だけでなく、県教育委員会との連携が強くみられる共通点があった。家庭教育支援にかかわる事業を継続的に協働でつくりあげてきた蓄積からどちらの団体も行政の担当部局と対等なパートナーシップがみられた。行政との信頼関係が構築されている現在は、行政からの財政支援は受けているものの父親の学び合いや父親と子どもたちをつなぐ実践は、父親たちが主体的に企画実施している。また、地元大学の教員との連携がネットワーク活動を支えている点も共通していた。

## 5. おわりに

本研究では、「おやじの会」をベースに父親の子育てに関わるネットワーク活動を行っている団体を家庭教育を支える学習組織と捉え、その成立条件・展開過程を整理し類型化を行った。地域のつながりの希薄化などを背景とした保護者の孤立が深刻化しており、家庭教育が困難な状況となっている。こうした現状から家庭教育を支える公的取り組みは進展しつつあるが、すべての親の学びや育ちを支えるには限界がある。公的な支援と市民組織の協働は喫緊の課題といえよう。とりわけこうした協働には従来の子育て支援専門職や母親だけでなく、父親や地域住民などの多様な主体の参画による豊かな支え合いに期待が高まっている。そこで本研究では、地域に新しい学習資源を生み出す組織としては必ずしも認識されてこなかった父親たちの子育てネットワークに注目した。「おやじの会」を出発点に、全国各地で組織されている父親たちの子育てネットワークの内、主要7団体（所在地：北海道2団体、宮城県、東京都、京都市、香川県、福岡市）を対象にインタビュー調査と資料分析を行った。いずれも先進的かつ目的志向性が際立った団体である。

本研究によって父親の子育てネットワークが家庭教育を支えるための学習組織として多様な展開があり、行政との協働という点でも展開していることが明らかになった。

子育て中の父親へむけた家庭教育支援を考える場合、本研究で取り上げたネットワークを学習組織と位置付け、彼らの特性を生かしながら行政との協働による新たな学習を生み出すことが可能であろう。現在、進められつつある家庭教育支援では、困難な家庭に専門職や地域住民が支援者としてかか

わるアウトリーチに視点が移りつつある。また、行き過ぎた家庭教育支援体制が監視社会を助長することになりかねないとの懸念もある。家庭教育支援において福祉的な支援の充実はもちろん必要な視点ではあるが、社会教育として家庭教育支援を豊かなものに展開していく視点が重要だ。家庭教育支援にしろ、子育て支援にしろ、いずれも親を客体と捉え専門職や支援者が諸課題に対して支援するという傾向も強まっている。社会教育研究として、教育・学習の側面からそれらとは異なるベクトルの家庭教育支援や子育て支援をいかに提示できるのかが今、問われているといえよう。

7つの父親による子育てネットワーク団体と家庭教育を支えるための行政との協働の関連について現段階における到達点をみてきた。あらためて父親のネットワーク実践をまとめてみると、ひとつのムーブメントといえるほどの力強い展開があった。“父親の子育てネットワーク運動”が日本において根付き、文化として広がりつつあるのではないだろうか。今回は学習の志向性と活動範囲に注目して整理を試み、行政との在り方を検討した。次の段階として協働の内容と担い手の父親の力量形成の関連について明らかにしなければならないだろう。

※本研究は JSPS 科研費 JP17H00078（研究代表者：吉岡亜希子）の助成を受けたものである。

## 注

- 1) 家庭教育支援の推進に関する検討委員会（文部科学省）の報告「つながりが創る豊かな家庭教育」2012年3月において、家庭の教育力が低下しているという認識を否定すると共に家庭教育が困難な社会であることが指摘されている。

## 文献

- 小崎恭弘（2017）「自治体における父親の子育て支援」、『家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援—少子化対策の切り札』別冊発達 33，ミネルヴァ書房，102-107
- 鈴木敏正『主体形成の教育学』御茶の水書房，2000 年
- 吉岡亜希子（2006）「父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容」『社会教育研究』第 24 号，北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室，11-23
- 吉岡亜希子（2011）「父親の主体形成—稚内市における地域子育て協同実践を事例として」，日本社会教育学会紀要，No. 47，61-71
- 吉岡亜希子（2013）「子育てグループ活動における父親の学習過程と意識変容—K 中学オヤジの会を事例に—」，『社会教育研究』第 31 号，北海道大学教育学研究科社会教育研究室，129-141
- 吉岡亜希子（2016）「親の学びと社会教育の役割—拡大する子育て支援は親育ちにつながっているのか」，『月刊社会教育』11 月号，国土社，3-10

# **The Formation Conditions and Classification of Childrearing Networks for Fathers: Focusing on Their Role as Learning Network for Parent Education & Support**

YOSHIOKA Akiko

**Abstract:** As regional ties are weakening, the isolation of guardians is becoming more serious. It may be said that the assumption of childrearing as a communal endeavor has collapsed, closing the family off from the rest of society. Under the present conditions, in which dual-income households are rapidly increasing, the father is required to take on the role of a parent more and more, and not only the mother. However, opportunities for the father to learn about parenthood are scarce, and more parental roles within the family. While measures are being taken regarding parent education & support, the efforts of government agencies are not sufficient on their own, and the desirable form of cooperation between civic organizations involved with child rearing support and government agencies is being explored.

Thus, this study viewed seven civic organizations which are engaged in child rearing network activities for fathers based on the “Oyaji No Kai (The Dad Club)” as learning network for parent education & support and analyzed them accordingly. The aim was to acquire a new perspective that can be employed to construct a model of collaboration, by organizing and classifying the formation conditions, development process, and learning content of these network.

As a result, it was found that it was possible to classify the seven practices that were analyzed in the present study into the following four categories: 1) sharing and providing support for specific child rearing issues, 2) gender equality, 3) support for formal education, and 4) reconstruction of local communities. When focusing on the tendencies of the learning content, broadly two types of frameworks were observed, 1) gender division of labor and 2) support for formal education and community building. On the other hand, it was possible to classify the range of activities into two types, 1) the community-based type and 2) the wide-area type. It was also found that even when speaking of the same kind of collaboration, depending on the learning content, it is necessary to change the range of activities.

**Keywords:** father, childrearing network, parent education & support, collaboration